

堀河百首題「擣衣」をめぐる

内藤 愛子

『堀河百首』の歌題に新奇な歌題が多数含まれていることは周知のことである。また、その新奇な歌題のうち、『和漢朗詠集』と共通する歌題が多くみられ、それらは歌題のみでなしに語句や発想を『和漢朗詠集』に典拠を求めた詠歌もみられ、『和漢朗詠集』との影響関係の濃さは既に指摘されている。^(註1)

それらは、少なくとも『堀河百首』の雑の歌題において『和漢朗詠集』と共通する歌題であるか否かには関係なく、和漢朗詠集や漢詩文に典拠を求めている傾向が顕著にみられている。^(註2)

そこで、四季の歌題に焦点をあててみると、四季の歌題において『和漢朗詠集』と共通する歌題で、しかも『和漢朗詠集』や漢詩文を典拠とした歌が多数見える歌題をいくつか見出すことができる。それらは雑の歌題と異って歌題自体が漢詩から輸入されたという特徴がみえる。今回はそのうち秋季に配している「擣衣」の歌題を取り上げてみたい。「擣衣」は漢詩文から輸入された歌題であり、その歌題を歌人達はどのように捉えて詠じたか整理し、検討を加えてみたい。擣衣に関しては既に先学の詳細な論考がみられる。^(註3)

『堀河百首』以前において、擣衣の歌をみると、『古今六帖』に「衣うつ」という分類が成されている。また、百首歌において、『相模百首』(『私家集大成中古1』)の「はてのあき」に擣衣の歌

がみられることは『同百首』との影響関係が注目される。

362 かせさむいもかころもてうつちのかすしらぬよもすきぬへ
きかな

勅撰集において、歌材としては『拾遺集』に貫之の歌が見える。

187 風寒み我が唐衣うつときぞ萩の下葉もいろまさりける

歌題としては『後拾遺集』が初出であり、秋下に三首みられる。それらはいずれも永承四年内裏歌合(一〇五〇)の詠歌である。

335 唐衣長き夜すからうつ声にわれさへねても明しつるかな

336 夜更けて衣してうつ声きけは急かぬ人もねらさりけり

337 うたゝねに夜やふけぬらむ唐衣うつ声高くなりまさるなり

このように、擣衣は歌題として新奇なものと言ってよいだろう。

又、『堀河百首』成立以後の勅撰集においては『金葉集』『詞花集』の両歌集には主題として現われず、『千載集』の秋下に主題とされ、五首が配列されている。そのうちの三首は『堀河百首』の詠歌(801・808・811)が選ばれている。次の『新古今集』には十一首に及ぶ歌が配列されるに至っている。このように勅撰集において、擣衣の主題として配列され、定着していく過程がみられる。

そのように勅撰集における擣衣の主題としての定着過程において、少なからず『堀河百首』の影響が窺われるであろう。

擣衣という歌題自体が漢詩文からの輸入されたものであるといふことから『堀河百首』の歌において漢詩文の影響が色濃くみられる。そして、擣衣は十六首すべてが聴覚的な歌材として捉えていると言えるだろう。

まず、表現用語をみてみると次のような特徴が見出せる。十六首のうち九首までが夜や夜に関係した用語が詠まれ、また、当然のことながら、衣に関するものが多くある。そのなかで唐衣を用いた歌は五首みられ、やはり用語においても漢詩の影響の濃厚なことを窺うことができる。だが、自然現象に対する用語は空(801) 風(804・808) 霜(802・816)であり、数少ないと言えるだろう。

次に、擣衣の歌十六首を表現類型に拠って整理してみると次のようである。

擣衣が漢詩文の世界から、孤閨を守る妻の悲愁であるというモチーフを詠じた歌が六首ある。そのうち、『和漢朗詠集』に直接の典拠が求められるだろう歌が三首見出せる。

仲実の歌

807 まつほととすきやしぬらん衣うつ碪の音のうらみ声なる

は『和漢朗詠集』の公乗徳

織錦機中 已弁相思之字

擣衣砧上 俄添怨別之声 (巻上十五夜組)

の第三、四の詩句の発想と表現を踏えた跡が見られる。また、師時の歌

809 我妹子か手玉もゆらに打ころも千声になりぬ夜のなかけれは

は白居易

八月九月正長夜 千声万声無了時 (巻上擣衣35)

の詩句を翻案とした詠歌であり、「手玉もゆら」という表現は『万

葉集』2065(註4)

2065 足玉も手玉もゆらに織るはたを君が御衣に縫ひあへむかもに求めており、記紀、万葉の用語に拠って独自の歌の世界を作り上げている。また、基俊の詠歌も同様の詩句を踏えたものと言える。

811 たか為にいかにうてはか唐衣千度やちたひ声のうらむる

この『和漢朗詠集』35は『白氏文集』第十九「聞夜砧」の第三、四句の出典で、砧の漢詩としては有名であり、直接『和漢朗詠集』から摂取したかは疑問が残るところである。又、この詩句は『源氏物語』の夕顔の巻にも引かれており、かなり一般化されていたと言えるだろう。

次に、「聞夜砧」の第一、二句である「誰家思婦秋擣帛 月苦風凄砧杵悲」等の漢詩文からの影響で、砧の音が夫を待ち伫びる妻の歎きであるということ踏えて詠じた歌は四首みられる。

801 恋つゝやいもかうつらん唐衣碪の音の空になるまで

805 ころもうつ槌の音にてよそなから人の心のほとそしらるゝ

806 故郷の夜さむになれは衣うつたひにや君も思ひいつらん

815 たのめをきしほとふるまゝにさよ衣うらめしけなる槌の音哉

また、漢詩文の世界を背景にしなが砧の音に心情を寄せる表現を用いた歌として

810 唐衣此里人のうつ声をきゝそめしよりぬる夜はそなき

813 いかはかり思ひそめたる唐衣なかきすからうちあかすらん

814 たか為と思ひそめてか終夜をちの里人ころもうつらん

の三首が上げられる。それらはすべて砧の音そのものに焦点を置いている。又、それらは藤原頭仲(810)と隆源(813)と肥後(814)の三首は「唐衣」や「衣」の縁語として「そめる」が用いられ、「そめる」は「染める」と「初る」の掛詞として用いられ、技巧を駆使

している。しかも、物語的世界の展開を背景にし、『源氏物語』夕顔のイメージの連想を喚起させるような詠歌に仕立て上げられていると言えるだろう。

次に、砧の音そのものを聞くとという扱いで詠じられている歌は五首みられる。

802 衣うつ槌の音こそたゆむなれたふさに霜の置にやあるらん

803 小夜深く礎にあたる槌の音のしけきはたれか衣うつらん

804 秋風はすくしくなりぬ唐衣たかためにとていそぎうつらん

812 なかき夜に衣してうつ槌の音や物思ふ人の友となるらん

816 小庭もさゆる霜夜に終夜をちの里にはころもうつ也

それらは、どれも「、らん」「、なり」という表現形式の類型が指摘できる。そのうち、永縁(812)の歌を除いては、いずれも単に砧の音を遠く離れたところで聴くという扱いのみでなく、砧を打つ人の心情や状況を推量する気持が詠じられている。

また、それらの歌のうち、典拠が見出される歌としては匡房(802)と永縁(812)の二首が上げられる。

802 衣うつ槌の音こそたゆむなれたふさに霜の置にやあるらん
この歌の「たゆむ」は『曾丹集』240『私家集大成中古Ⅰ』に

240 風によりてうては衣を手もたゆみ寒さにいそぐ秋の夜な／＼とあり、擣衣を主題として詠じた歌であることから、この歌に拠った考えることは可能であるように思われる。

そして、この歌は途絶えがちの砧の音から打つ腕に霜が降っていると推測している。このように、機知に富んだ歌に仕上げている。

812 なかき夜に衣してうつ槌の音や物思ふ人の友となるらん

この永縁の歌は『後拾遺集』336の伊勢大輔の歌の発想及び表現を典拠としたと考えられる。

336 夜更けて衣してうつ声きは急かぬ人もねられざりけり
また、承德元年東塔東谷歌合(『平安朝歌合大成』第五卷)の七番擣衣の右の歌に

14 秋ふかみ夜風し寒くなりゆけば衣して擣つ音ぞたえせぬ

右歌しだらかなれども「衣して擣つ」などいうことは中比の名歌なれば特にや

とある。同歌合は『堀河百首』の成立時期と近い時期の歌合であることから「してうつ」は擣衣の歌にはよく使われた表現と思われる。又、萩谷朴氏は同歌合の内容構成において、判辞にみえる「中比の名歌」を先上げた『後拾遺集』336伊勢大輔の歌とされており、同歌の影響力の大きさを知ることができる。

「してうつ」に関しては神作光一、島田良二著『曾根好忠集の研究 全注釈篇』の240の歌(既述)の評に

為相本は、上句が「風寒みしでうちの衣手もたゆく」とある。

(中略) 為相本の本文が正しいとすると好忠集が初出例になる。とあり、大変興味深いので付け加えておく。

次に、十六首のなかで特徴的な歌としては俊頼の歌(808)が上げられる。それは、砧の音を秋の深まりを感じるよりどころとして捉え、秋の悲愁を詠じている。

808 松風の音だに秋はさひしきに衣うつ也たま川の里
また、俊頼の私家集である『散木奇歌集』(『私家集大成中古Ⅱ』)において、擣衣を主題とした歌はこの歌を含めて三首みえる。そのなかに「擣衣の心を」という詞書のある歌

471 秋かせの音につけてそうちまざる衣はおきのうはくならねと
とあり、単なる偶然かもしれないが二首とも風という天象の歌材を用い、しかも砧の音そのものが秋季を象徴する歌材として捉えられ

ている。これら二首から、少なからず砧の音が漢詩的世界と異った次元のものとして創り上げられているということが推察できるだろう。そして、搦衣の歌題で歌枕「たま川の里」が詠まれている歌は今までにみえず、新しい詠法として注目される。又、たま川の里は搦衣との取り合せや俊頼の言葉採集の方法から『万葉集』³³⁷³の東歌³³⁷³多摩川に曝す手作りさらさら何そこの児のここと愛しきが連想されて、武蔵の玉川と解してよいように思われる。

この歌のように搦衣の歌に歌枕を詠み込むという詠法は既に松井律子氏が、新古今時代の搦衣の歌において歌枕の頻出している傾向を指摘し、この俊頼の詠歌が新古今時代の歌人に与えた影響の大きさを述べている。

それは『新古今集』の秋下に搦衣を主題とした歌が十一首配列されているが、その配列の中に歌枕を詠み込まれた歌が三首見られることから窺い知ることができるだろう。

このように、俊頼の搦衣の歌は漢詩文を根幹としながら歌材として彼なりに消化し、歌枕に拠って独自の世界を創り上げようとする傾向が見受けられる。

以上のように、『堀河百首』の搦衣の歌における表現類型を大別してみると、漢詩文から砧の音を孤閑を守る妻の歎きとして捉えられているものと砧の音そのものを聞くという二つのパターンに分けることができるであろう。後者は「、らん」「、なり」という推量する形式が大半を占めていて、打っている人の心情を推測している詠歌である。

佐藤恒雄氏は、搦衣が漢詩と同様に夫の帰りを待ち侘びる妻の歎きを詠じたものから、砧の音を聴くということに焦点を置いた詠風への推移を指摘している。

その点からすると、『堀河百首』においての搦衣は既述のように、両方の詠風がみられる。しかし二つの詠風を数の上からみると、砧の音そのものに焦点を置いた詠歌が十六首中の半数以上を占めている。それは搦衣の詠風の推移する現象の過程に位置していると受け取ることが可能であろう。

特に、俊頼の歌は漢詩文を基としながら、砧の音を秋の悲愁の歌材として扱い、歌枕を用いるという工夫に拠って新しい独自の世界を創り上げようとする試みがみられるだろう。

このように、『堀河百首』における搦衣の歌は、漢詩の世界から輸入した新奇な歌題であることから、いまだ本意本情が定まらず、様々な要素が混入している状態と言えるだろう。だが、搦衣の本意本情の成立する過程において『堀河百首』殊に、俊頼の詠歌は重要なポイントに位置していると言ってよいだろう。

註1 橋本不美男・滝沢貞夫著『堀河院御時百首和歌とその研究

本文研究篇』（等間書院 S52）

註2 拙稿『堀河院御時百首和歌』の雑部をめぐって―『和漢朗詠集』と漢詩文―（『研究紀要』第25集）

註3 佐藤恒雄氏「衣を搦つ女―続後撰集の一考察―」（『解釈と鑑賞』S42・5月号所収）、松井律子氏「搦衣の歌―新古今時代の歌題の一考察―」（『就実論叢』第9号）

註4 同歌は『古今六帖』の「はた」の分類にみえる。

註5 日本古典文学大系『源氏物語一』一六九頁参照。

註6 註3に掲書。

註7 註3に掲書。